



枇杷園句集後編

坤



枇杷園句集後編卷之三

秋

初秋

主ふもきほくさくまゝる巻の秋  
秋もさや目小る團扇の崩くさ  
さけり秋の麻そりつれさ蓬うさ  
うね出まゝ刃をさけり秋のうぶつら  
秋さけりや蓮の紫買る池めく利

虫蚊よりさし辱れて眠らばとやえさ  
旅情いふさふかきしげまおほき

茨をふらちふも死あてなき秋

七夕

兄弟々笹河もひや星すり  
大膽や赤川をわらぬはしの書  
天河どしに越るもろし申あいの南  
水艸小むくしてまらさ益の月

死後の枕上をむしやむといひま  
夫あり墓所小詣て

握りまてむしをれちを少塚の叫

新涼

柳子の露をれしをれ河原の

野秀亭萩見

萩乃雨あらしのそら萩の声

女郎花

あはれおふく笑く日おこもるも女房の家

木槿

むしきくや紫ふね木槿なりとれ一り

薄

蟠脚の凡る月を置く芒う那

友鳳亭

秋の日にしー静しとて梅蔓とらふりの黄

色ある小老母艸の青くくくを州くくく

交了野邊の氣をささるる花瓶ふ

活了砧の鼓白きよを望みれすくからぬ雨永く

静ふぬけて庭の空しあふんしん

こえを秋ハ

萩をこえもくふんをこえて遠きあひ

小夜ふぬく月のかきも霜やねく

露

山間や夜を捨てる秋葉のち

世にうつらうつらと人かたき草の露

蟋蟀

まきまきと鳴る鳴る蟋蟀

霧

いりぬ日の外ふるの霧

得車一字

おきくお聞るる之も車

角力

萩の根の小家るる角力の朝

蜻蛉

窓のけら羽きけ蜻蛉の飛も

八朔

竹馬や野ら八朔の里

月 題朔日月

あつとあつと月あつと柴乃煙

山ささやゆたふるの夕月夜

花鳥のくもたさのひらき古寺の各を成  
就院とてくやまむらゝ芭蕉の翁くも菴か  
晩望して河原もあつたてくも竹の日の月  
かゝらひい出れり又五條坊木見といへるこの  
喰をゆゝめつてと日月塚をさへ築ふらま  
それさく五十奉のきりかゝるもて尾破も木柴  
ゆゑ狐狸おのちやうやう人をもつてふもさか  
く少ぬくふ濱島のた琴と法華の信実の長

者なり少小堂仏堂持りけいふいもかゝる遠くを  
庭中の松柏あつたを得垣外の風をかゝるを  
撞く吟客の面起まゝも時かゝるをや

と夕月スリとく似てこのとこ日月  
應汀ふて

月のあもる門よとて出てもおとくし  
宿山寺

雲あもて衣のしめあもるあう南

甚目寺

雨あけや月も何れ申へ鷺の宿  
降るるも月や粟のこころの陰

秋夜憶馬六老人

目さく光やまね老をおもふや月の入

仲秋無月

月おむらふらくとも雲のさへも

雨後

月こそぬや水ゆくあはれ砂の形

帶梅亭

盃をのりて山月を望む筆を投じて花園を  
おも思ひに故園の友とらにおほそいふもれ  
さぬをおもひなすこころをいふの凡流海士の  
まよふをきいて主人の雅情ふくむるは  
それ鳥をさうくともよそをまふれ月

良夜清光

明月を——花のさうきゝるを——う那——  
いふよふうきゝるをきし月ののほこのう口  
八月望の夜岳輜少女大身様を其成事とて木々  
端の長め寺のあそぶ帰路のたのむれをのふ龜か  
つけの社は徳禪のきこもく候よまきぎのふの州の病  
月の走をあらきふ——うきさうき——のふいおきよこ  
な——ねえおの——袖のふもくひて帰るをぬ——ぬ  
今宵よ——いふよふの月を——いふよふの月を——いふよふの月を——いふよふの月を——

くと依青く交老峯小集りていふおきしていふやういふ。

宵闇をこても泣く露月の友  
唐黍の垣ゆふ月形確り那

紫山子

老れ月の作をこ出——うきさうき——いふよふ  
誰不送春秋一年三百日  
煙霞藥此身恐治愚痴疾  
月をよを壁を——あそぶよのまはは





五季六年先海を北十々のとて幸洲の砂よふ  
たひて降もつ花ふ腰瓢とらへ出て傳墨を  
雨もよこ奇なすあふと酔臥しつらふれうは世の  
つれとちなわつるちる里家人々青子く遺言を  
まうてそのちよひやうしぬをさういひこゝぬ慈の  
中のおゆこも今宵この月ふきしむにのこ

うれしき事なきよよ悲しき事こゝれ

雁

湖の書たり鳥とよもいぬふ幸の村

鹿

鹿の音や梢ら月の中

題しき

新きく菴のね夕らるるはし  
殊の標同一木蔭を昨日まひ  
宇治へゆきしちとらうかな里秋の山  
八月やうおのまらあもくく

夕のけり鳴のよきけり萩のこえ  
九十の歳あり東水く祖父あり手つゝ葡萄  
をくゑて秋色あり玲瓏く少人多く  
をれぬ曰我のうゝ葡萄をうゝ三季小  
しと蔓をうゝ五季うゝ子をむきぬや  
うゝ比隣を覆へる日人あつて雅客の  
餐餘をうゝふさぬ日あつてけり  
青錢七百文ふかくうゝもむきぬやうゝ

かゝるも季の秋のそめその人又未だ云も  
又うゝくゝとあゝびら二貫文をうゝぬや  
ぬやうゝうゝ云季く歳くうゝのうゝ  
つひり黄金十ひりをつたるぬ榭下小板屋を  
作ると笑て曰葡萄のこめふなる葡萄のこめふ  
うゝて葡萄をうゝ名附くその子東水予門人うゝ予  
東水うゝあつてうゝ

茶菓

山菜黄よりついであつた鳥の聲

戀

いもろ力萩折のひてさふふり

菊

香をさしあつた葉よりあつた鱗の形

漏桶やましくり黄菊を一つうそ

菊の香や燈をくくみ升のたぐ

小庭の菊をさふかの殿薄衣の君と名つけり

いもろ力萩折のひてさふふり

や大きくなつた菊の九日のふり日よそ

花ひびくついであつた鳥の聲

わきうそあつた鳥の聲

愛出とさふれをさふひの葉乃友

かゝつた鳥の聲

さこの原と君の日なれはあつた

送暮雨翁

月と菊の氣をよまう勢を旅寐ふ  
半雨舎ら山を額おほて水を脚下踏てふの  
松間小天をうらふ出まぬ舟を松をりて何少  
高月とけりてては候きれこよみの月を  
むゆとまとい子細かきとらふ

半天より出まぬ伸え何少後の月  
後のおほき藪の約束や月を友

秋暮

小高まハちけりちなう秋の暮

龍山寺の如くさ成呂々別荘小入。

お紫一て菴ら柚味噌の小ほひる糸

平齋の紅葉見小浪花の麦太のせ戸自慢松田の

儒凡ら落のくさく日とも市山の端ふあうさぬ

海山此をわらちとく新夕をみち

日暮て五老峯ふいてれをあのおまふのりて

やうあてふ糸を席よふうくくしうれは



枇杷園句集後編卷之四

冬

時雨

青鴉啼〜や〜社の先〜  
〜も〜そい〜ちも出〜ぬふ破の月  
松低よ〜も〜也〜社の鴉〜  
川違ふ船〜り〜ぬ〜り〜も〜き〜う那

尚齋會

壽とふかむいふは自然なり少自然を  
事おしむ人おのつらう命をがいのり入る  
後代も掾楹けつらき茅茨きうまそか  
あれた上あふふらぬ殿ろおろりあて  
はらぬをやまむいふまうらぬかひ方  
けきと松のそら葎草のちふ居して自然  
をあやめいむ老のちらいくそくは歌をいふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

かろして文化四葉二月おろりしれぬもて  
寒ま日暮雨巷の埋火れもろりかー静くま  
あり勢てるこみし世のりぬのつらまにあを原いぬ  
茅ぬく軒ををーしれのおちぬこの菊

艸菴

洩表月をかくさかとうひてりーしれ  
あーらまをうらむふここのやらー山

送百非天民帰奥州



廿日あちう少るをなす〜〜〜人のよきお母のうき  
を旅の〜〜〜〜〜名呼まんと風相して〜〜  
のく少帰るまは〜百非天民の別きを送る中おも  
百非ちの友巢居の子と〜〜いへをうき〜  
ありきふ名あを〜〜

ま〜〜純もあなを〜〜して旅のそ  
落葉

畑中〜〜持一色の落葉〜〜

幾乃中おも一木あや落葉うき  
さ〜〜と〜〜喜れ〜〜て〜〜あなを〜〜哉

牛道の磯家〜〜木葉うき  
奥田氏池亭

去りうきや木葉懐帝を池のそ  
茶花

茶のそれり何の香〜〜あや  
茶花のあち三日月のおほひうき

自感

茶ふくのせしれいんし梅干を食ふまはこれ  
 ちりあつたよくちあつたあのをちりあつたを  
 うのちりあつたあのをちりあつたあのを  
 と茶ふくしと持出さし其うかきさるちりあつた  
 ちりあつたあのをちりあつたあのをちりあつたあのを  
 ちりあつたあのをちりあつたあのをちりあつたあのを  
 ちりあつたあのをちりあつたあのをちりあつたあのを  
 ちりあつたあのをちりあつたあのをちりあつたあのを

千鳥

ちりあつたあのをちりあつたあのをちりあつたあのを  
 二村や子ちりあつたあのをちりあつたあのを  
 朝ちりあつたあのをちりあつたあのをちりあつたあのを

木兔

木兔やちりあつたあのをちりあつたあのを 日半日

木枯

木枯ちりあつたあのをちりあつたあのをちりあつたあのを

小瀬里

風や鶴そそぐ宵乃宿

葱

小式部とよむぬも又守想深細

冬木立

あけぬわくまよ一葉二葉や冬木立

冬木も越の志山しと初も

炭薪主人二瓢を賣もむしと袖しして

東武不傳しひとつらつらの壁と小懸てそ

菴を守しむまふか主人帰るもむしと

鹿島をよみ答ふ

あし鴨のふえひくなくかゝ

余

力をつむしとちぬほの阿し山

ゆきも張るも膝しとさしと新か髪哉

題しと書

指つる水阿蘇板かきぬ冬々  
さむし社と漁村の柳枯るる里  
手とらけ社と時子りてハもきし  
冬の日や菰草してまき新法師  
冬に板やまきてまき仲のこゑ  
くくくく冬とらける雲よ鶴

桑名渡海

船底へ月のさしむきむくつ那

火桶

月さして志賀の鐘すく火桶うか

木枯

冬枯や板戸ふくむ朝月夜

粟津里龍の園ふ松杉鬱々ぬ留の堂とく  
丈艸法師のまこくぬ菴のあけく  
いつく破きとてぬそのあけく無名菴の傍と  
かこのこくれ庵をうけくまぬそ社と人の住



生海鼠

うねり出てくさくさともふくむく海鼠の家  
ふゆふち海鼠もねみあつらふり

枯蘆

雪のうらと日の出まはりの枯蘆の花

玉野里

霜白し夢喰麻のあしは

炭

峯の雪も宇治の炭舟くさるる

雪

雪やまむとく月さへあふ山の上  
月々雪々折くくく竹のかけ  
老う少やふく我おかへ雪乃笠  
月雪の夜をあつらへるね情ふ  
日の落ぬ方々西あつ雪乃原  
雪ふりくれて馬の壁ふり鄰く

夜 びきりしつゝ山 買ふ 出心 庵の雪  
青雲屋の名も 青竹帯雲のふらふら  
まこと三井寺の雪も 飛て湖上青  
く

軒小 ぬき 雪ふり かの ぬき ぬき ぬき

鉢敲

かゝる社かなの ちて 申さぬ 鉢敲  
萬和難波津小 帰あ 守事 社 ぬき ぬき ぬき

松抱園小 未まで 難盆を ぬき ぬき ぬき  
交り社 八目 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき  
ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

蘇 根 け 焚 巾 尾 花 を 折 ぬき ぬき

綱代守

可 守 海 山 ぬき ぬき ぬき ぬき

炬燵

そて果しゝ身のゆへまをさるる

守武風

玉 ちかぬきとて奇妙なる細なる南

枯野

ふふれ日もしりぬ枯野の水溜り

冬籠

冬籠大思の灯をちかむる

戀

煎 蛎や壳をさるぬ浅芽生る

煤掃

まひしよあさふかへ煤を眼を不掃

年暮

おとをくるとちかむるあゝ一季の梅

事ゆへや雪を四隅よりめ椿

換く空をれうかよ一日の南



歳抄偶成

千斛東家酒 西家費萬錢  
生涯醉中了 不問歳時遷

采花堂主人方鼎書

世石前編後編と何ハ  
き強ぬといふも後編お  
とるあまのつねの句もまこ  
きうはれと我友をぬ  
人のひりこ入写しあや方  
まゝもまゝとす 梓行しそ

ふらふらおのりおのりおのり  
くわくわくおのりおのりおのり  
やうやうおのりおのりおのり  
師のいひおのりおのりおのり  
書いひおのりおのりおのり  
いひ卓池いひおのりおのり

いひ松杷園白集后編  
と頃久くおのりおのりおのり  
ついでと 跋とす

曙菴秋舉

大正八年九月讓受

名古屋市東區鍋屋町二丁目十一番地

朱樹會

